

博士論文要旨

論文題名：追悼から遠く離れて： 反・戦後イデオロギーの台頭と靖国神社をめぐる言説の推移

立命館大学大学院国際関係研究科
国際関係学専攻博士課程後期課程
イトウ ケンイチロウ
伊藤 健一郎

本論文は、敗戦から今日に至るまでの靖国神社をめぐる言説構造の変化を記述し、今日の靖国神社が実質的な追悼を担う場ではなく、戦没者追悼を契機として発生する国家間ないし国内の緊張関係を積極的に煽動するような装置として機能していること明らかにする。この事実が示唆するのは、靖国「問題」が合理的な討議を通しての解決を前提とした論争系ではなく、戦後社会に蓄積した諸矛盾が顕在化する場となっているということである。

本論文は、靖国問題が、戦死者をいかに処遇し記憶するか、あるいはいかに加害と被害が織りなす過去の総体を引き受けるかという「追悼」に関する課題ではもはやなく、靖国問題をひとつの契機として生じるような分断状況において、いかに「日本/日本人」の立場を「敵」に対して主張し「日本/日本人」を勝利に導くかといったゲーム的で、ディベート的な課題にすり替わっていることを明らかにした。

靖国神社や歴史認識に関わる論争に際して生じる、そうしたディベート的言説空間の特徴を記述するにあたって、本論文では、「戦後」に対する否定的な情念に駆動された解釈の枠組みを「反・戦後イデオロギー」として析出した。反・戦後イデオロギーにおいては、「人権」「平和」「民主主義」あるいは「文化的多元主義」等の諸価値は「あるべき日本」を抑圧する概念として否定的言及の対象となる一方で、「靖国神社」や「英霊」といった対象が、戦後社会のアンチテーゼとして重要な地位を占めるようになるのである。

この論文はまた、追悼をめぐる言説が反・戦後イデオロギーによって領有される状況に至った経緯を言説分析を通して記述し、その中で歴史修正主義が果たした役割についても分析した。

本論文は、追悼とは、近親者の喪失による悼みを緩和し、大量死という事実を社会構成的な体験として引き受けとめ、市民的連帯と抵抗の契機とするかといった問題意識によっても駆動されてきたことを確認した。とりわけ本論文では、戦前国家社会における人間軽視の思想と体験への強い反感を保持し、自身の体験に依拠しながら過去と現在への態度を決定していた戦中派知識人らの言説も分析の対象とした。追悼を通して、人間軽視の思想への警鐘を鳴らし続けていた戦中派知識人らの批判意識は、今日において、反・戦後イデオロギーの台頭と、シニカルで相対主義的な態度によって貫徹されたディベート的言説空間の浸透を抑止し、戦後民主主義の思想的基盤を強化するという社会的意義を持つことを示唆するものである。

Abstract of Doctoral Thesis

Title: Far Away From Commemoration: A History of Yasukuni Debates and Rise of Anti-Postwar Ideology

Doctoral Program in International Relations
Graduate School of International Relations
Ritsumeikan University
イトウ ケンイチロウ
ITO Kenichiro

Commemoration of fallen soldiers has long been a source of debate in postwar society in Japan. Yasukuni Shrine, the center of the debate, was founded in early Meiji era by the newly established Tokyo government, which defeated and replaced the preceding regime, in order to exclusively commemorate those who fought for the imperial army. Since then, the shrine, as an institution of the government, had played a central role for commemoration of war dead until Japan's defeat in August 1945. Under the demilitarization policy of allied forces, Yasukuni Shrine was separated from the state and transformed itself into a private religious institution.

This paper discusses the way in which postwar Japanese society has faced the reality of mass death of the lost war; some reacted to the loss of soldiers with grief, some expressed anger to those in power. Some experienced the defeat as a liberation, in hope of reforming Japan to non-militaristic and democratic nation, while some experienced the defeat and subsequent reform with sense of humiliation.

This discursive study on the history of Yasukuni debated in postwar Japan since 1945 to the present emphasizes influence of "anti-postwar ideology", a frame of interpretation or a set of belief motivated by disregard and resentment to ideas and values that represent postwar society such as "human rights", "democracy", "cultural diversity" and "anti-militarism".

This paper, through a discursive study on Yasukuni debates, shows how the shrine has become a source of debate-like environment dominated by authoritarian attitude and cynicism.

This paper clarifies the way in which the reactionary ideology has influenced the postwar society and formulated socio-political ideological backlash movement, where Yasukuni Shrine plays the symbolical role.